



山手小学校と初めての交流 リボンが結ぶ地域との絆



友人でもある山手小学校の先生に「清華苑が生徒たちのためにできることが何かないかな」と相談していたところ「SDGsの勉強をしている生徒に福祉施設の方から何かレクチャーをしてほしい!」という話をいただき、授業に行くことになりました。

法人として小学校との関わりは初めてだったので、生徒達が楽しみながらSDGsについて学べる企画を私自身ワクワクしながら考えました。授業は清華苑で取り組んでいるSDGsの取り組みをクイズ形式で伝えるなど工夫しました。説明の時は真剣な眼差しで話を聞いてくれて、クイズの時にはチーム内でワイワイと楽しみながら答えを考えてくれる姿を見て企画して良かったと思いました。

授業終了後、生徒達に囲まれて、「また授業しに来てほしい!」「お姉さんが付けているシトラスリボンがほしい!」と言ってもらいました。

そこで、当法人のケアハウスの入居者や職員と一緒に生徒達からリクエストされたシトラスリボンを作成し、先生を通してプレゼントしました。シトラスリボンを通じて入居者の皆さんと地域が繋がっていると実感することができました。また来年、先生からご依頼がありましたら、是非授業に行きたいと思っております。

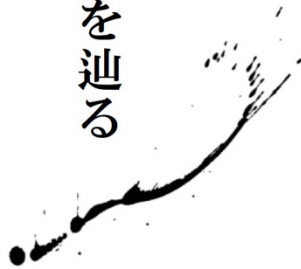
(小林紗弥)



QRコードからYOUTUBEの動画をご覧頂けます

- 2016年 **ご利用者の笑顔を求めて**
特別養護老人ホーム 清華苑 (池内玲夫 川口琴音)
書類審査 一次審査
 - 2017年 **自宅での生活スタイルを施設でも**
特別養護老人ホーム 清華苑 (川口琴音 竹中胡桃)
二次審査通過 本戦出場 優秀賞受賞 (2位)
 - 2018年 **職業特性を踏まえたアプローチ**
老人保健施設 清華苑養力センター (大中由宣 飯貝和成)
二次審査通過 本戦出場
 - 2019年 **シニアファッションショーへの取り組みを通して**
～車イスから歩行器歩行へ～
老人保健施設 清華苑養力センター (大中由宣 飯貝和成)
二次審査通過 本戦出場
 - 2022年 **もう一度トイレに行きたい**
老人保健施設 清華苑養力センター (平田麻澄 大中由宣)
二次審査通過 本戦出場 介護福祉士会賞 (3位)
- 心のドアを開いた「カギ」**
特別養護老人ホーム 清華苑 (駒澤和希 二星木実)
二次審査通過 本戦出場 C-1グランプリ賞受賞 (1位)

挑戦への軌跡を辿る



挑戦

Def Up!

C-1グランプリへの道

はな華
HanaHana
社会福祉法人 三幸福社会
清華苑 広報誌「はな華」

VOL.10
2022年12月15日発行



事例発表を通じ、チームと個人の成長に繋げる。



令和4年度 C-1グランプリダブル快挙!
★C-1グランプリ賞受賞 特別養護老人ホーム 清華苑
★介護福祉士会賞受賞 老人保健施設 清華苑養力センター

「C-1グランプリ」は、兵庫県介護福祉士会が主催しており、介護の日(1月11日)を記念し、介護の質を向上させるため日々努めている介護職員の取り組み事例を、広く一般の皆さんに見ていただき、介護の仕事を身近に感じてもらうこと、そして、介護職員が自らのケアを振り返る機会とすることで、新たな気づき・発見をして仕事への更なる活力に繋げていくことを目的とした大会となります。

毎年、兵庫県内の介護事業所が書類選考(一次審査)とプレゼンテーション審査(二次審査)を経て本選出場を目指します。

三幸福社会は平成28年に初めて応募しましたが書類選考で落選してしまいました。その悔しさをバネに挑戦し、その後は書類選考、プレゼンテーション審査を通過し、本選出場を続けています。

そして令和4年度はなんと、「特別養護老人ホーム清華苑」と「老人保健施設清華苑養力センター」の両施設が同時に本選出場を成し遂げました。

その結果、「特別養護老人ホーム清華苑」が見事、グランプリ賞(1位)を受賞し、「老人保健施設 清華苑養力センター」が介護福祉士会賞(3位)を受賞しました!それぞれの受賞を記念して今回の特集では、両施設の発表内容をご紹介します。

(統括部長 田村智之)



心のドアを開いた「カギ」

特別養護老人ホーム 清華苑
発表者 駒澤和希



A様紹介

入所者のA様は、男性で要介護3。既往歴として血管性認知症やうつ病等がありました。身体状況は一部介助が必要で認知症の周辺症状や精神疾患による気分のむらがみられていました。

A様入所までの経緯

A様は、結婚後養子を貰い育ててきましたが、平成16年に交通事故でご息子を亡くされ、そのショックにより仕事を辞め無気力状態となりました。神経内科へ受診され、うつ病、血管性認知症と診断されました。その後、高齢夫婦2人での生活は見守りが必要と判断され、平成17年より当法人のデイサービスを利用されました。そして、平成28年頃ケアマネジャーに対して昼夜問わず寂しさや痛みの訴えの連絡が頻繁に入るようになり、当施設へ入所する運びとなりました。

A様入所後の課題

入所してからのA様は、日常的に「自分は1人だ」「こんな所には、おられへん」「信用できない」「ご飯に薬を混ぜられている」等の発言がありました。これらの発言から自分は1人きりで周りには頼れる人や信用できる人がいないという疎外感を感じている事が読み取れます。A様は、うつ病や血管性認知症を

患っていたこともあり、感情のコントロールが難しく、大声を出し泣きながら「わしは、1人なんや」と訴えられる事がありました。

課題解決に向けた取り組み

私たちは、A様が疎外感をなくし、職員や施設を信頼して安心してここにも良いと感じてもらえるためにはどうすれば良いかと考えました。まず、A様の訴えの真意を確認し信頼関係を築ける環境を整え、うつ病からくる気分のむらや周辺症状の緩和を図る為に職員のみではなく、施設職員全体で取り組みを行う事が必要だという結論に至りました。

まずは、認知症ケア専門士が中心となり、認知症委員会の会議で協議しました。認知症委員会とは、認知症ケア専門士など、様々な部署から構成され、認知症の周辺症状への理解や対応についてケアの統一を図る為の委員会です。A様のうつ病や血管性認知症について施設職員の理解を深める事とA様が穏やかな生活を送ってもらう為にはどういった対応を取ればいいのか意見を出し合い方法を探りました。



取り組みの経過

A様とコミュニケーションを深め、情報収集した結果、車を見たり運転する事や犬が好であることが分かりました。また、傾聴同調のスタンスを取る事で息子に電話をしたいことなど把握する事が出来ました。私たちは次の3つの対応を実施し、結果を確認しました。
①好きな犬や車の動画を見せよう。
↓特に今までと変化はみられませんでした。
②息子に電話を掛けたいと頻繁に訴えられた際は、職員が息子役を演じ電話応対する。
↓一度は納得されるものの、時間が経てば同じ訴えが見られた。
③大事されていたご自身の免許証を手にとってもらう。
↓特に大きな変化はありませんでした。
④A様が昔に呼ばれていた呼び名を使いコミュニケーションを続ける。
↓A様が信頼していた人の名前を覚えていただけになり、職員の名も呼んでいただけになりました。次第にA様とのコミュニケーションが取りやすくなり、新たな情報を得る事が出来ました。

⑤A様が家に帰る為に鍵が欲しいと訴えがあれば、鍵をネックレス状にしてお渡りする。

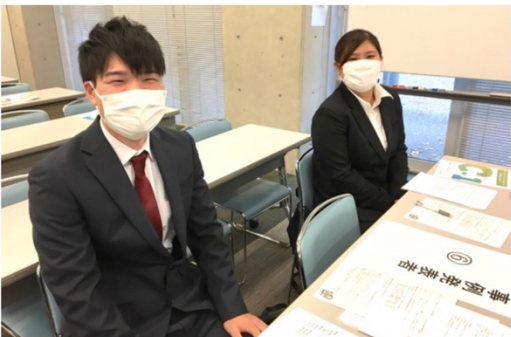
↓肌身離さず大事に鍵を持たれ、「鍵もってんねん」と職員に嬉しそうに報告をしてくれるような場面が見られました。

以前までは、帰宅願望があれば、「お金を取りに帰るために家に帰らしてくれ」と訴えられ、職員の言葉掛けには全く納得されませんでした。鍵をお渡ししてからは、夜間帯に家に帰りたいと訴えが見られた時は、「明日の朝イチに家に帰りたいから車を用意して」といってなど発言内容に変化が見られるようになりました。

私達も「家の鍵を持つこといつでも家に帰ることが出来る」「家族から信頼されている」という安心感を感じると同様にA様にも安心感が生まれ、大切なカギを預かったという事実が職員への信頼に繋がるきっかけになりました。この時A様の心のドアがこのカギによって開かれたのです。

取り組みの結果

A様に直接かかわる介護員だけではなく、様々な職種や立場から意見を取り入れ、A様の症状や背景について情報収集を行い、ケアの統一を図りました。A様は「自分は1人だ」と孤独を訴えられていましたが、A様が望んでいることを汲み取り、少しずつ実現していくことで「周囲に頼れる人がいる」「安心して生活できる環境である」という認識を持つてもらう事ができました。



最後に

訴えが見られ始めたころは、その本質を見抜くことが出来ずに、A様の世界観を十分に理解することができませんでした。結果として不穏症状を生じさせてしまうことがありました。しかし、A様に寄り添い、思いを聞き取り、共有・分析することで、A様の真意に沿った対応を図る事ができました。

自分の思いを受け止めてくれる人や環境があるという認識を持つて頂くことで、安心感や職員との信頼関係を築くことに繋がります。その人を理解し、寄り添う姿勢と行動を今後も大切にしていきたいと思います。



発表者コメント

駒澤和希

今回、C-1グランプリに出場して事例発表という初めての経験をさせていただきました。当時のご利用者との関わりを振り返り、学びを深める機会となりました。その中でも特に大切だと感じたのは仲間の存在です。様々な方々の協力があり、今回賞を受賞する事が出来たと思えます。

今後も仲間を大切に、協力し合い、様々な事に挑戦できたらと思います。本当にありがとうございました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

もう一度トイレにいきたい

老人保健施設 清華苑養力センター
発表者 平田麻澄



A様紹介

A様は、80歳の女性で要介護4。長谷川式簡易知能検査は、30点。自宅では、長女と孫と同居していました。

入院に至る経緯

令和3年4月、自宅で尻もちをつき入院となりました。腰椎圧迫骨折の診断で下肢にはしびれが残り、尿便意は曖昧さもみられました。病院から退院許可ができましたが、「自宅に帰るのは不安」とのご本人の意向で、リハビリの継続と今後の方向性を検討するため老人保健施設に入所となりました。

入院前の生活

4年ほど前、独居生活に限界を感じ、長女宅へ移り住まれました。長女、孫とも日中は仕事があり、日中独居の生活でした。長女宅では夕飯の準備や洗い物などの家事を手伝い、母親としての役割を果たしておられました。令和3年4月の転倒まで身の回りのことは自立しており、入院をきっかけに要介護認定を受けるとの事になりました。

老人保健施設入所後の生活

下肢の随意性が低く排せつ動作に介助が必要な状態であるため、日中独居の自宅に帰ることへの不安感が強く、杖や歩行器を用いた移動の獲得は難しく、車

イスでの移動がリハビリのゴールとなりました。立ち上がり、立位保持は支えがあれば可能ですが、膝折れがあり安定しません。福祉用具を利用し、ベッド上で寝たまま、もしくは端座位の状態での排泄の処理ができないか検討するも、「配慮していただきたいことには感謝をしますが、もう一度トイレで排泄をしたい。」と受け入れられませんでした。下肢の痺れ、腰部や臀部、大腿部の痛みが強く、「これまでできたことができなくなつた」と悲観的になられることが多く、「骨折して神経もダメになったし、今ままできていたことが段々できなくなつた。もう死にたい。」と話されます。自宅で行っていた内服の自己管理を再開するよう提案しますが、「前は自分でやっていたけど家に帰る見込みもないから施設の職員さんをお願いしたい。」と後ろ向きな発言が目立つようになりました。

ケア内容と経過

入所当初は、立ち上がりは支持物を持ち軽介助で可能。特に右足の踏み替えが拙く、膝折れもありました。端座位の保持は安定しており、自力で靴の着脱もでき、日中、夜間とも職員の見込みによりトイレ誘導を行いました。

入所から2ヶ月程経過した頃より、痛みが増強し、ベッドで過ごすことが多く、悲観的な様子が見受けられました。

施設医師の回診時に意向聴取し、専門医受診も可能であることを伝えるも、「受診しても完治するわけではない」との考えで、痛み止めの種類を消炎鎮痛剤（ロキソニン）から抗神経痛薬（リリカ）に変えて経過観察することにしました。

2週間ほど様子を見ると、痛みは若干引きまりましたが、リハビリが進まない状況は変わりません。これまでできていたことができなくなったことから、「家に帰れる見込みもない」と施設での生活に意欲は依然感じられませんでした。

改めて施設医師よりA様に意向確認を行うと、下肢の痺れや腰部から大腿部にかけての痛み、膝折れがあるが痛み止めの調整で痛みは改善傾向であるとの事。その上で専門医の受診は希望されず。自力での体位変換も難しいが、自分のペースで移乗介助をしてもらおうと痛みは軽いことがわかりました。

自力でのトイレ動作獲得を目指してリハビリをしてきましたが、介助を受けないとトイレ動作は難しいことを自覚しておられました。痛みが軽いときには上肢だけでなく体幹なども筋力をつけるためにリハビリに取り組むこと、職員は移乗や体位変換の際に苦痛の少ない方法を検討することとなりました。

施設医師との面談以降、リハビリの時間以外に起きて過ごす時間を設けたいとご本人より希望がありました。1日1

回はベッドから離れ、介護職員と一緒に廊下で立位の練習に取り組み、他のご利用者と談笑を楽しまれるようになりました。

明るくなったA様に心境の変化を尋ねてみると、「よっしゃ、行こう」と言ってもらえたエピソードを教えてくださいました。「長々と励まされるのではなく、シンプルな言葉がとても嬉しかったの。」と。

1日1回の離床は、廊下での立位訓練、車イスの自操練習と内容が追加され、立位保持は30秒から60秒に延長し、トイレでは職員に支えてもらい立ち上がり、ズボンを下ろしてもらって用を足すことができるようになりました。

「次の目標は自分で車イスに移って、ズボンの上げ下ろしができるようになることだ」と話されるようになりました。

考察

施設医師、リハビリの担当者、看護、介護の職員など専門職がそれぞれの分野でご本人に対するアプローチをしたことでご本人のADLは改善されました。このアプローチの結果は、我々の専門性の発揮と共にご本人の心の持ちよう（意欲）によるところが大きかったと思います。痛みがあり、精神的な落ち込みがあった入所当初に比べ、ご自身から自主的に生活の中にリハビリを取り入



発表者コメント

平田麻澄

二次審査の事例発表時には、大幅なタイムオーバーをしてしまい内容もまとまりきっていない状態でした。本選に向けて10分間に自分の言いたいことがまとまるよう納得のいくまで構成の見直しを行いました。

人前でお話をする事は何度経験をしてきましたが、当日は自分の思いをきちんと発表することができました。有難いことに賞を頂くことができました。また、このような経験をさせて頂けたこと、ご尽力頂きました大中ケアマネに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。